四国・水こぼれ話
Water Information Saloon Shikoku
談話室 Vol 43

川に思う

徳島県　石井町長
坂東（ばんどう）　忠之（ただゆき）

私の家から３分も歩くと、もう吉野川の堤防に出る。その堤防の道を少し下りると対岸につづく長い木造の橋があった。遠い昔の「高志潜水橋」辺りの光景である。ここから約二キロ下流には今も第十堰がある。この橋が子供達の遊び場だった。吉野川は大きく、ゆったりと見える流れも水中では思いのほか速い。水は透明で、川底を泳ぐ魚影もはっきりと見えるが水深は深い。

今思えば子供達を遊ばせるには危険な場所ではあった。しかし、当時の子供達は、当り前のように橋から川に飛び込み泳いでいた。誰に教わったわけでもないが、泳げない子はいなかったように思う。

この橋の上流に広い瀬があった。鮎漁の季節になると、この瀬が子供達にとって恰好の鮎の漁場となる。子供達の漁は至ってシンプルなものであった。漁具は先のほうから真ん中あたりまでを、細く割った竹の棒ひとつである。この竹の棒を持って瀬に入り、水面を力いっぱい叩くと、その衝撃で一瞬鮎が目を回したように横になって浮いてくる。そこを素早く捕まえるのだ。学校が終った昼過ぎから夕方まで子供達の漁はつづく。毎日が大漁だった。子供達は四季おりおりに遊び方を見つけては、年中川と遊んだ。

川の側で暮す私は、川の怖さも身をもって知っている。私の住む石井町藍畑地区は町の北端にあり、吉野川に貼りつくように帯状に広がる農耕地帯である。肥沃な土地もそこから得られる豊かな収穫も全て川からの恩恵である。しかし、その歴史は洪水との戦いの歴史でもあった。川は、いつの世にも大いなる恵みと強い戒めで、我々に自然や川とのかかわりを問いかけてくる。このかけがえの無い人類の宝が永遠に受け継がれるために・・・。

さて、私たちはこの問いかけに、どんな答えを出せるだろうか。

第十堰

現在の高志潜水橋